

令和4年度 小学校教員向け環境教育研修会 実施報告

「やってみよう！環境学習プログラム」

第4回「持続可能な社会づくりのための環境教育の推進」（テーマ：ESD）

□実施日時 令和4年8月18日（火） 13時30分～15時00分

□開催方法 Zoomによるオンライン

□実施内容

1. 事務連絡・開講挨拶等

- ・事務局から受講上の注意、全体スケジュール等の説明
- ・環境局総務部環境政策課から開講挨拶等

2. 講師からの講義

(1) 講座の流れとESDについて(藤森先生)

環境教育の実践は、教育課程のどこに、どのように位置づけているのかを明確にする必要がある。以下のレベルに分けて実践を提案。

1：授業で実践してみる

2：カリキュラムマネジメント、単元開発、学年事業等で行うもの

3：特色として位置づけ必ず行うもの

1～3は、取り組みの順番ではなくどの部分からも実践可能。まずは、実践したことを俯瞰的に見て教育課程に位置づけることが大切である。





世界では、人口が増え続けることでの食糧問題、AIの発達により今後なくなる職業が予想され、環境問題も多くが解決できていない状況である。このように、さまざまに変化する社会を生きるために、教育も変化してきている。

例えば、ユネスコの教育の「役割や学習のあり方についての提言」では、「知ることを学ぶ」、「試すことを学ぶ」、「共に生きることを学ぶ」、「人間として生きることを学ぶ」に昨年度「自分自身と社会を変容することを学ぶ」が追加された。このように、学びは「静態的」から「動態的」へとシフトしてきている。

教育が変わろうとしている中で日本の環境対策を世界と比較すると、温暖化対策は60か国中49位、プラスチック発生量は世界で2位、リサイクル率は34か国中27位ととても低い。持続可能な社会づくり、教育は急務である。

現在学校で進めている「持続可能な開発のための教育（ESD）」は、SDGsのゴール4の7に文言があり、質の高い教育はほかのSDGsを達成するのにとても重要なものであると世界的にも位置づけられている。

その上で、ESDを学校で実践するためには、以下のようなものが求められる。

- ・ ESDの目標は
- ・ 学習指導要領との関係
- ・ どのような能力、態度を育成するか
- ・ 学習内容は
- ・ 指導方法は
- ・ 評価方法は
- ・ 学校全体で取り組むとは

また、指導に当たって生徒だけが変わるのではなく、先生や学校も変わっていくことが大切である。

(3) 実践事例：脱プラスチックの社会に生きる(関口先生)

プラスチック問題はこれらの理由から今回の取り組みとして取り上げた。

- ・児童・生徒にとって身近な課題として捉えることができる
- ・どの地域でも課題意識をもって、ESDの手法をもって実践できる
- ・未来の地球や人類の存続につながるアクションへとつながる可能性
- ・国連の掲げるSDGsと合致
- ・決してなくなるプラスチック

また、今回の取り組みはマイクロプラスチック問題をESDという手法を用いて、SDGsの達成できるようにすることを目指している。ここで掲げるSDGsの目標とは「人材育成像」であり、SDGsを当面達成できる人物の育成と考えている。

プラスチックを扱ったからESD, SDGsを達成したことにはならない。ESDの本質は、持続可能な社会を創る人としての資質・能力・態度を育てることであるため、ESDを達成できる人材育成を主眼に置いて進めなくてはならない。

まずは、子供たちの取り巻く環境についてアンケートを通して確認した。この中で、ライフスタイルの中でプラスチックが浸透してなくすことは難しい状態になっていることが分かった。また、今までの「消費者目線」だけの学習ではなく「製造者目線」での学習も必要になっていることが分かった。

次に、3年生の脱プラ生活のプランを考えた。特に、「2030年に向けたプラスチック利用のアクション」が重要であると考えている。

学習の流れとしては、「つかむ→調べる→まとめる→発信、行動」をとっており、単元の中で繰り返すことで発信、行動につながるようにしている。

活動を通して、プラスチック問題を自分の生活から考えられるきっかけができ、見方、考えかたを育てる教材としての価値が感じられたが、小学3年生では製造者の視点はまだ出てきていないことが分かった。

(4) 実践事例：つなげる環境教育の輪(鈴木先生)

ファストファッションでは、化学繊維を多く使用し安価なものが増えることでごみも増えている。食品では、フードバンクなどもあるがすべてのものを回収・リサイクルすることは難しい現状がある。プラスチックも、マイボトルの使用が促進しているが、ペットボトルを購入する人が多くいる問題がある。その他にも、たくさん環境問題がある。これらを解決する行動をする際に、瓶の使用は重い、リサイクルするのが面倒であるなどの、心の障壁があるのではないかと考える。また、都会の子供たちは自然体験が少なく、モニター越しのことが多く、本当の本物の良さ美しさを知らないことも問題である。

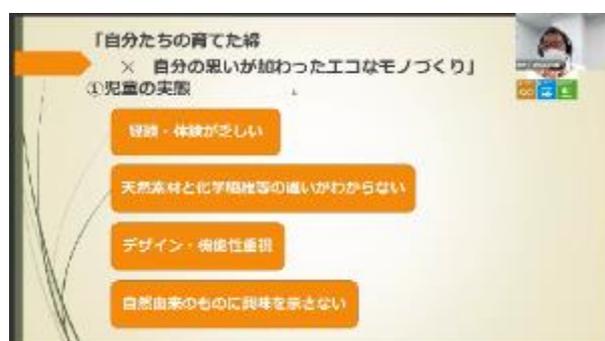
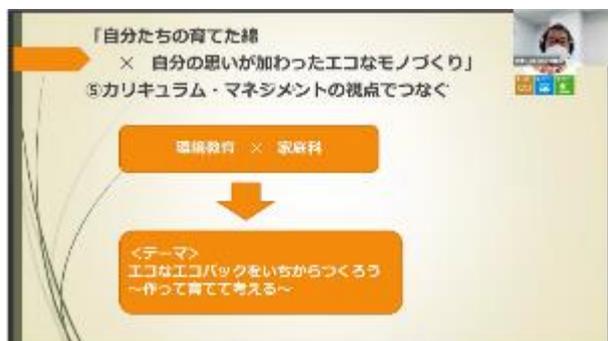
そこで、研究主題として、「美しいものを美しいと感じる心」を育てることとした。これは、エコだからと考えずに、自然と手に取るものが環境にやさしい物の選択・行動になるそのものが、環境保全につながると考えたからである。

この主題の中で2つの事例を挙げた。この事例を作成するにあたって検討した、生徒の実態と教師の思い、どのような力をつけてほしいかなど、様々な授業づくりのヒントとなる「学びの地図」という形で示した。

① 5, 6年生、家庭科・総合の時間

「自分たちの育てた綿×自分の思いが加わったエコなモノづくり」

② 5年生、総合の時間



(5) 質疑応答

質問：今現在課題となっている環境問題を、職員室で共有するにはどうしたらよいでしょうか。

關口先生)

私の学校では、毎日の夕会などで環境問題がニュースになった際は共有している。総合的な学習の中で校内研究として取り組んでいるので、年に1回は発信・提供している。だれかが話すと、教員は興味を持つので、発信していくことが大切。

藤森先生)

教員が一人ひとり、画用紙に一番印象に残ったオリパラを書いて学校の玄関に張っ

ている。オリパラが終わりましたので、今度は実践しているSDGsを張ろうと計画している。このように、先生たちが何を行っているか「見える化」をしている。

授業をしよう！ですと、ハードルが高いので、掲示物など低い物から実践してはどうでしょうか。

質問：人間の生活がほかの生き物を苦しめていることや環境を汚染していることにとっても心を痛めてしまう生徒がいます。環境問題を扱うときに配慮しなければいけないことは何でしょうか。

棚橋先生)

命を粗末にしないことを道徳の「命の尊厳」などで話した後に生物を飼うなどする。先生同士(学年やクラス同士)での価値を共有することも大切である。

關口先生)

生き物に焦点を当てると、そのような感情が生じる。先生も授業後に、頑張っ実践したのに、生徒だけでは何もできない、絶望を感じてしまう方もいるのではないか。

ただ、それは発想の転換、環境問題を学ぶではなく、「環境問題で学ぶ」が大切なのではないか。

例えば、人間が地球を汚染している、ということを知るだけではなく、それを今後自分たちはどうしていくのか、と考えることで想像的な思考を生むのではないかと思います。

藤森先生)

生徒は、生き物から学ぶ、大人から学ぶことが多いと感じられる。先生が、かわいそうだね、よかったね、と感情を発信することで、それも生徒は学んでいるのではないのか。

鈴木先生)

自分たちは、どのような取り組みを、行動をしていけばいいのか、改善するためにはどうしたらいいのか、君たちは何をするのか考えてみよう、と小さな形で問いかけてみてはどうか。

質問：ESDの授業をする際、どのくらいの期間をイメージしていらっしゃいますか。

鈴木先生)

短いと5時間、長いと20時間もある。実施する内容によって変わると思います。

棚橋先生)

町調べをする、川に行くなどの体験をする、時季によって出てくる生物もいる、学校の大きさ、いろいろな面で変わってくる。

総合の時間を軸に、1学期、1・2学期など大きくとった方がよい。なぜなら、時間が短すぎると先生が教えてしまう授業になってしまうからである。その点に気を付けること。

ただ、どの力をつけたいのかなどから逆算する必要がある。

質問：ICTをどのように活用されていますか。

関口先生)

eポートフォリオ使用することが多い。実際に模造紙をみんなで書こうとすると、時間がかかってしまうが、ICTを使用すると同時に書き入れられ、共有することができ、時間短縮になる。

また、一人一台タブレットを持っているので、一人1つ動画を撮らせて、そのまま親に共有するなど、いろいろ実践している。

デメリットもあるかもしれないが、実践してみて精査する必要がある。

藤森先生)

先行き不明な社会の中で生きていく子供たちにとって、正解のない答えをどう出していくかという、問題解決的な学びが重要になってくる。それをするにあたって、切り口として環境教育があるのではないかと考えている。

友達と意見を出し合い、知恵も出し合い、意見を創っていく共同的学び(コラボレーション)が大切になる。そこで欠かせないのが、ICTである。そして、自分たちの共同から、社会との共存・共同をどのようにしていくのか考えなければならない。義務教育を出るときには、社会に対して自分たちは何ができるのか、どのように発信するのか考えられるよう、一つの単元ではなく、様々な教科、総合的な時間を使用して、問題解決活動をどのようにしていくのかを考えていかないといけない。

また、eポートフォリオは自分たちの活動を振り返ることで、自分たちの妥当性を考え、修正することができる。今までは、ノートなどであったが、eポートフォリオを用いることで、ビックデータをクラウドに残すことができる。今後、「eポートフォリオ」「振り返り」「ビックデータ」の扱いが重要になってくると思います。



(チャット内コメント)

(チャット内のコメント)

- ・発表から学ぶことが多く、知らなかったことがたくさんありました。
なるほど～の連続です！

3. 事務連絡、解散、アンケートメールの送付